

新成人の皆さんへ！

「親のこころ」

〔1万年堂出版「親のこころ2」

木村耕一編著より〕

成人の喜びを最初にお伝えしたい方々は、どなたでしょうか。おそらくご両親ではないでしょうか。

親は我が子の成人を本当に喜んでいきますし、幸せを心から祈っています。そんな親の思いを知ることが、親を大切にするにつながつていくのではないかと思います。

親のこころのありがたさに気付かせてくれるお話を成人のお祝いとしてお届けします。

「子どもがいつ独りになっても、強くたくましく生きていけるように」

(59歳女性)

母は、私を生んでから、心臓弁膜症のため床に休んでいました。衣食住のすべてに困っていた日々、私は六歳の頃から、病気の両親を看病しながら、学校に行く前に新聞配達をしていました。朝三時から六時の間に、小さな体に新聞をくくりつけて、雨、風の中でも、徒歩で配達に回りました。

ある朝、いつもより一時間寝坊して四時に目が覚めると、横に寝ているはずの母がいません。私はもうビツクリです。母が代わりに新聞配達に行ったのです。具合の悪い体にむちうって、一日、配達を手伝ってくれた母に、涙が出てきたあの日のことは忘れられません。

わが子が働きながら通学するのが悲しかったのか、母は病気がつきあいながら養鶏場に行き、卵をケースに入れる仕事をしていました。私に食べさせるのが楽しみだったようです。「子どもがいつ独りになっても、強くたくましく生きていけるように育てるのが本当の親なんだよ」とよく言っていました。今思えば、「若い頃の苦労は買ってでもせよ」と言われるのがよく分かります。

ある日、母は病院の廊下で、「どんな困難に出会っても負けずに強く生きてね。両親の分まで生きてね」と、私に言いながら、なぜか私の後ろ姿をいつまでも見守っていました。それが母との最後の別れでした。

たくさんさんの言葉で私を励ましてくれた母に「ありがとう」です。

「レレレ」の字で書かれた、

父からの最後の手紙

(31歳女性)

父は私が中学三年生の時に病気で亡くなりました。私が小学五年生の時に初めての手術をし、入院や復職を繰り返してと、長い闘病生活でした。

病名を知ったのは亡くなる数カ月前だったと思います。それまでは、さほど重大な病気だとは思っていませんでした。母から病名を知らされた時は、うまく状況を理解できませんでした。中学生になった私は反抗期に近いような状態になり、素直になれず、また、痛がったり病院に行きたがらなかったりする父に対して、いらだちを覚えたこともありました。入院している時も、部活の忙しさにかまけて、あまり見舞いにも行きませんでした。

状態が悪化し、母が頻繁に病院に寝泊まりするようになると、私が母に代わって兄と自分のお弁当を作るようになりました。何も知らない私は、受験生だったこともあり、「何で私が……」という思いが少なからずありました。そんな時、父から手紙をもらいました。

「おはよう。今日も朝早くから弁当作りごころうさん。上手にいつ

いますか？ 早く起きて作るのは大変ですが、もう少しお願いします。こづかい入れてます。大事に使って下さい。とうさんより」

字がとても上手だった父でしたが、その手紙の字は力なく、ヨレヨレの字でした。これを書くのにどれだけの時間がかかったんだろう……。そして、手紙にあった「もう少し」は、父にとって「元気になること」と「死を迎えること」のどちらだったんだろう……。父は病気と、死に対して、どのように向き合っていたんだろう……。もっと、もっと話をしておきたかった。今さら思います。

手紙と一緒に入っていたおこづかい……。

銀行員だった父はお金に厳しく、月々のおこづかいは、少なめで、むやみに物を買いはやめることもありませんでした。誕生日やクリスマスプレゼントも、上限は五千円で、それ以上の物が欲しい時は自分でおこづかいをためて補うルールでした。もっと欲しいと思ったこともありましたが、父が亡くなってからも金銭面で苦労することなく、進学、生活できたのはそんな父のおかげです。あの時のおこづかい、父はどんな思いでくれたんだろう。